



【今週の暗唱聖句】

愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

第一ヨハネ4:7

●愛する者たち／アガペートス(キ)

とは「神に愛されている人々」という意味で、英語でも"Beloved"と訳されています。まず神に愛されていることが私たちの行動の土台なのです。

●互いに／まずクリスチャン同士ということなのですが、了見が狭いと感じるでしょうか。その必要はありません！クリスチャン同士でさえ、同じ神に愛されているという土台に立っていながらも互いに愛し合うこ

とは大変なことなのです。しかし、人間的に考えたら不可能に思えることを「必ず出来るからやってみなさい！」と神は励まされるのです。我慢できない人を受け入れ、赦せない人を赦せるようになったなら、そのような愛こそ、本当に世の中を変えて行くことのできる力になりますし世に対する証しになるのです。

●愛のある者／本物のクリスチャンになっているかどうかの最終的な試金石は「愛の有無」ということになります。これは単に優しいとか暖かいということではなく、キリストが愛したように愛することが出来るという意味です。つまり喜んで自分を犠牲に出来る性質が身に付いているということです。

【デボーションの確立のために】

～主イエスに習う～

▼ イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。マルコ1:35

▼ イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。ルカ5:16

私たちはキリストの弟子としての召しを受けている訳ですが、主イエス様からデボーションの仕方についても学んでみましょう。いくつか大切な原則が浮かび上がってきます。

●朝早く／イエス様たちは毎日教えを乞う人たち、いやしを必要とす

る人たちに対して働いていましたので全くと言っていいほど、一人になる時間がなかったでしょう。主はそのような中で「朝」という邪魔されない時間を選ばれたのです。自分にとって一番集中できる時間はいつでしょうか。

●寂しい所、荒野／時間と共に「場所」も鍵です。パソコンの前だとメールが気になってしまうならゲストルームか地下室、屋根裏に！



●よく荒野に／主はデボーションを習慣化しておられました。私たちも習いましょう。

## 【先週のメッセージより】

人の子は、失われた人を捜して  
救うために来たのです。

ルカ19:10

人に忌み嫌われる売国奴、ローマのために税金を取り立てる取税人、しかもその頭にまで成り上がったのがザアカイであった。何が彼をそこまで駆り立てたのか？背が低かったことから来る復讐心や負けん気か？しかし登り詰めた「取税人の頭」は何とも空しい世界だった。同じ町の盲人バルテマイの目をイエスがいやしたと聞く。そのイエスが今町にきている！好奇心もあったが、どうしても行かなければという衝動に駆られ、外に飛び出してはみるが群衆で見えない。機転を利かせ先回りして木に登る。イエスが真下に来た。

「ザアカイ降りて来なさい！」人が一斉に顔を上げ、自分を見つめる。ヤジや笑いも聞こえる。しかし次に聞いた言葉は生涯忘れることができない。「今日はあなたの家に泊まることにしてあるから。」その瞬間、悟ったのだ。自分が神に知られているならそれ以上何もいらぬことを。今までのでたらめな生き方を悔い改めて人生やり直しだ！

## 【今週の英語】

(Adrian Rogers "Adrianisms" より)

**"This Book will keep you  
from sin, or sin will keep  
you from this book."**

**Dwight L. Moody**

※聖書はあなたを罪から遠ざけておくことができるが、逆に罪はあなたを聖書から遠ざけることになる。D.L.ムーデー (19世紀伝道者)

## 【この教会のビジョン (3)】

※聖書66巻を神の言葉と信ずる聖書信仰に立って宣教の業を推し進めて行く。

「科学が発達した時代に聖書を神の言葉だと本気に信じているような人は申し訳ないが頭が弱いし、洗脳されているのだ。聖書は所詮人間が書いた物だし、宣教とが伝道は考えの押し付けて迷惑だ。神はいると思えばいるし、いないと思えばいない。あくまでその人の考え方次第だ。」

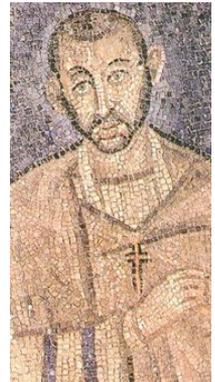
と言われたら何と答えますか？

### KNOW WHY YOU BELIEVE !

なぜ聖書は信頼できるのか。なぜ聖書は本当に神の言葉なのか。確かに信じたときには聖霊が信じることができるよう助けてくださったが聖霊は私たちが頭を使うことを要求されているのだ。「聖書信仰」について数回に亙り考えて行きましょう。

## 【家 族】

涙を流して  
祈られている子は  
決して  
滅びることは  
ありません。



アンブロシウス  
四世紀ミラノ主教